

二つの読解をめぐる 安田百合絵

角川「短歌」1月号の川野里子による時評を興味深く読んだ。そこでは昨年十一月に開催されたシンポジウム「没後30年 再発見・葛原妙子」が取り上げられていた。斉藤斎藤・平岡直子らの新しい世代が、「写実」をキーワードにしながら葛原作品をあくまでテクストとして読み切ろうとした（川野はそれを「ミニマル読み」と呼ぶ）のに対して、川野・水原紫苑は技巧だけでは語れない「全存在を賭けた」「言葉の余」に読みの重心を置いた（こちらは「存在読み」と称される）とされている。これが面白かったのは、川野が鮮やかに整理したミニマリスタ的読解対実存的読解というシエーマが、そのまま最近の世代間の懸隔、齟齬を表しているように感じられたからだ。歌壇に論争を巻き起こした「虚構」そして「私性」の議論は（一周まわって）作品の読みにおける作者の存在感という問題に行き着いた（回帰した）ように見える。大辻隆弘の言うところの「彫りの深い作者像」（『近代短歌の範型』）が歌の世界から立ち上がってくることを評価するのか、それとも作品を純粹にテクストとして読み味わい、その美的価値を評価するのか。どちらをとるかで、よいと思う歌も変わってくる。この評価軸をめぐる、中堅以上の歌人は前者を、若手歌人は後者を支持することが多く、溝のようなものが出てきているという漠然とした印象を受けるのである。

・皆誰かを波に獲られてそれでもなほ離れられない 光れる海石（いくくり）

梶原さい子『椿／リアス』

この歌集には震災が決定的な影を落とし、震災以降のどの歌も、作者の被災体験と切り離して読みえない。歌に読み手の人生の歩みが深く刻まれ、その生活史から照射することで歌が輝きを帯びてくる。引用歌などはその模範的な例といえる。

・空白について考えようとしてそのひとが立つ窓辺を思う

土岐友浩『Bootleg』

一方この歌は、詠み手の経歴を知らなくてもすんなり読める。歌集全体にかすかな物語性や構成員意識もあるが、歌は作者の人生やその歩みをダイレクトにあらわさない。しかし別の次元でこの歌は読者の胸を打つ。読者は、窓辺に立つ「その人」の孤独を見つめる作中主体の孤独を感受するよう導かれるのだ。

二歌集のスタンスをかなり恣意的に対比させてみたが、「実存読み（存在読み）」なら前者を、「ミニマル読み」なら後者をより評価する傾向が出るのだろうか。そうかもしれないが、そうでない可能性もあるだろう。梶原の作品は、作者像と切り離してミニマルに読んでもなお、歌としての魅力を放つからである。

ミニマル読みと実存読みのいずれにも意義がある。ただわたしとしては、歌はまず歌としての価値を大事にしたい。それがあってこそその実存読みだし、免罪符としての〈実存〉は望まない。

わたしたちは、パスカルの孤独を、彼が人間の悲惨を見つめ続けたことを知っている。しかし残された紙片は、彼の実存を超えたところできらめき続けている。それゆえ『パンセ』はすぐれた作品なのだ。短歌にも同じことが言えると思う。